

コサギ 英: Little Egret 学: *Egretta garzetta*

1. 分類と形態

分類: コウノトリ目サギ科

全長:	♂618.6±6.37mm,	♀578.8±8.39mm
翼長:	♂293.5±2.24mm,	♀280.1±2.14mm
尾長:	♂102.6±1.65mm,	♀94.2±1.23mm
露出嘴峰長:	♂82.8±1.11mm,	♀78.0±0.81mm
ふ蹠長:	♂104.8±1.22mm,	♀97.7±1.18mm
体重:	♂604.5±20.40g,	♀487.2±16.10g

※Nota(2000)に基づく。各値は平均±SEで表した。

羽色:

雌雄とも全身白色。繁殖期には頭部に2本程度の飾り羽と胸や背にレースのような飾り羽が延びる。嘴と脚は周年黒色で、足指は黄色。目先の露出部は黄色をしているが、繁殖期には赤味を増す。足指の黄色の範囲は個体によって著しく変化に富んでおり個体識別が可能なのである(山田1994)。



写真1. コサギ。

鳴き声:

ゴア、グアと鳴く。

2. 分布と生息環境

分布:

イギリス、フランスからアフリカ、インド、東南アジア、日本、オーストラリアまで、広く分布し、6亜種に分類される(del Hoyo *et al.* 1992)。

日本に生息する亜種は*E. g. garzetta*である。英国などでは次第に生息分布が拡大し、1990年代末になると新たに繁殖するようになった(Musgrove 2002)。日本では、多くは本州以南に留鳥として生息するが、北日本のものは冬期に暖地へ移動するものもある。

生息環境:

海岸から内陸の平野部の河川、湖沼、水田、ハス田などの水辺に生息する。

3. 生活史



繁殖システム:

昼行性で、日中は水田や河川、湖沼などの水辺で、単独あるいは群れで採食し、夜間には河畔林や水辺に隣接する丘陵林、人工物などに集団で就棲する。特に、良好な採食地が出現すると一時的に多くのコサギが集まって採食する(Kersten *et al.* 1991)。繁殖期には、竹やぶや樹林地などに他のサギ類と集団でコロニーを形成し営巣する。4月ごろから造巣が始まり、4月下旬ごろから産卵が始まる。一夫一妻で繁殖するが、つがい外交尾も頻繁に行なわれる(井上 1996)。

巣:

巣は、竹やスギ、広葉樹の枝の上に枯れ枝などを積んで造られる。時には、生木を嘴でくわえて折って運ぶ。形状は皿型(写真2)。

卵:

卵は青緑色で、長径35.5~48.8mm×短径34.5~35.5mmの長楕円形または短楕円形をしている(清棲 1978)。一腹卵数は長野県善光寺平周辺での調査では1~8卵、平均4.6卵と報告されている(羽田・岩崎 1982)。



写真2. コサギの営巣。

抱卵・育雛期間:

抱卵は雌雄で交代して行なう。初卵を産卵したあとに始まり、孵化は非同時孵化である(井上 1996)。抱卵期間は22~24日。孵化後、雌雄で抱雛を交代で行なう。雌雄で育雛を行ない、親鳥は採食地と巣を往復する。巣内育雛期間は孵化後約4週間と報告されている(井上 1996)。

4. 食性と採食行動

食性:

魚類、甲殻類をおもに摂食する。新潟県での調査から、コサギはハス田ではドジョウ(31.3%)を多く捕食し、河川ではオイカワやヤリタナゴなどの遊泳魚(73.3%)を多く捕食する(図1:山田 1994)。

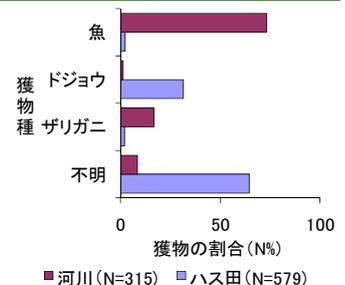


図1. 新潟県におけるコサギの食性。山田(1994)を基に描く。

採食方法:

採食方法は、水の中や岸辺にじっと立って水中に魚を見つけるとサッと嘴を入れて捕える方法と、ゆっくりと歩きながら獲物を探す方法がある。前者は動きの速い魚種を、後者では泥の中に潜むドジョウやザリガニなど動きの遅い獲物を捕らえるときに多い(山田 1994)。また、採食の際に、足を小刻みに動かして魚を追い出して捕らえる行動や水面に嘴を付けて上下に動かして波を立てて小魚をおびき寄せる行動も行なう(坪島 1994)。



写真3. 獲物を探すコサギ。

5. 興味深い生態や行動、保護上の課題

● コサギは減っている?

コサギは、わが国に生息するシラサギ類では最も普通に生息し、個体数も多いと言われている(井上 1996)。実際、1980年代には栃木県では平野部の河川に普通に生息していた。1980年代後半に栃木県の平野部の河川の23か所で冬期に1km×100mの範囲で調査をしたところ、図2の12番を除く22か所でコサギの生息を確認し、個体数も調査1回あたり平均0.75~9.00羽を記録した。しかし、2000年代に入ると栃木県や埼玉県など東日本では、コサギの生息

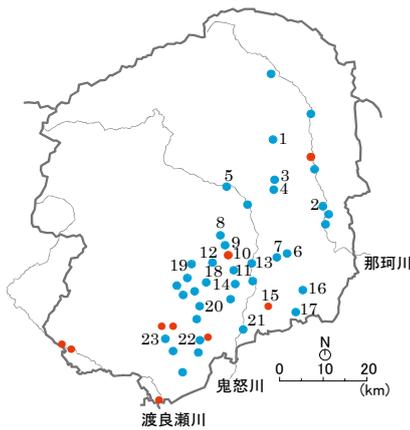


図2. 2000年代後半の栃木県における冬期の生息地点。赤が生息確認地点、青は生息を確認できなかった地点、番号が付いている調査地点は1980年代後半の調査地点を表す。

状況が悪化したことが示唆されるようになった(河地 2002, 嶋田ほか 2005, 内田 2007)。そこで、2007年から2010年の冬期に、栃木県内のコサギの生息状況の変化を明らかにするために、前述の1980年代後半に調査を実施した23か所を含む平野部の河川や池沼45か所で踏査を行なうとともに、1980年代後半の調査地では記録個体数を比較した。その結果、2000年代後半では、調査を実施した45か所のうちコサギの生息が確認されたのはわずか9か所であった(図2)。さらに、1980年代後半の調査地と同じ場所では23か所中2か所のみ合計3.83羽が記録されたに過ぎなかった。したがって、栃木県では冬期のコサギの生息状況は著しく悪化している。なお、宇都宮市の市街地ではコサギが多数記録され、住宅地の小河川やビル街の中規模河川に集中的に生息していた。これは、一つにはビル街に冬場があったこと、河川工事などで住宅地の小河川に良好な採食場所が存在したことによると考えられた。

では、なぜ栃木県ではコサギの越冬個体数が減少したのであろうか。河川環境は、約20年間で河川改修や出水などの影響で、大なり小なり変化していた。しかし、河川改修後に新たにコサギが記録された調査地もあり、少なくとも河川環境の変化がコサギの生息に影響していることは少ないように思われる。嶋田ほか(2005)は、宮城県伊豆沼・内沼でのコサギの減少の原因として小魚の減少を、内田(2007)はオオタカによる捕食の増加を挙げている。しかし、栃木県では食物資源の調査やオオタカの食性に含まれるコサギの割合などが分かっていないため、はっきりしたことは分かっていない。栃木県では、コロニー調査によってコサギの繁殖個体数が減少していることも示唆されている。冬期のコサギの個体数は、繁殖成績にも影響されることから、今後は、巣立ち率などの繁殖成績も調査する必要がある。

● アンケートによる全国の様子

一方、全国でのコサギの生息状況に変化はないのだろうか。そこで、バードリサーチでは2008年からアンケートによって全国のコサギの生息状況を調査している(平野 2008)。その結果、東北地方以南から68件の情報が得られた。このうち生息状況の変化の有無についての回答では、「変化なし」が30件(44.1%)と最も多く、次いで「減少した」が18件(26.5%)、「わからない」18件(26.5%)であった。一

方、「増加した」は2件(2.9%)だけであった。

得られた結果から「わからない」との回答を除いた50件を便宜的に関東以北と東海・近畿地方、中国・四国・九州地方の3地域にわけて比較すると、関東以北では減少したという回答は43.3%で、東海地方以南の地域よりやや多い傾向が得られた(図3)。

本アンケートでは、情報件数が少ないこともあり、栃木県の調査のような明瞭な結果は得られなかったが、全国を対象としたアンケート調査でも、減少したと認識している回答者が少なからずいることから、コサギの減少が示唆されたと言えよう。今後、コサギの生息状況がさらに変化するのか、継続して観察を行なう必要がある。

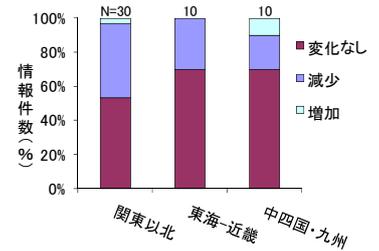


図3. アンケートによる地域別の生息状況。平野(2008)にその後の情報を加えて修正。

6. 引用・参考文献

del Hoyo, J., Elliott, A. & Saegatal J. 1992. Handbook of the birds of the world vol. 1. Lynx, Barcelona.

羽田健三・岩崎文. 1982. 善光寺平におけるコサギの個体数消長と空間分布. 鳥 31: 41-56.

平野敏明. 2008. コサギは郊外の大らかな河川で減っている? アンケート調査中間報告. バードリサーチニュース5(10): 1.

井上良和. 1996. コサギ. 樋口広芳・森岡弘之・山岸哲編. 日本動物大百科 3, 鳥類 I. pp.45-47. 平凡社, 東京.

河地辰彦. 2004. 栃木県におけるコサギとダイサギの生息状況の変化について. Accipiter 10:27-36.

Kersten, M. Britton, R.H., Dugan, P.J. & Hafner, H. 1991. Flock feeding and food intake in Little Egrets: The effects of prey distribution and behaviour. Anim. Ecol. 60: 241-252.

Nota, Y. 2000. Sexual size dimorphism of the Little Egret *Egretta garzetta*. Jpn. J. Ornithol. 49: 51-54.

清棲幸保. 1978. 増補改訂版 日本鳥類大図鑑III. 講談社, 東京.

Musgrove, A.J. 2002. The non-breeding status of the Little Egret in Britain. British Birds 95: 62-80.

嶋田哲郎・進東健太郎・高橋清孝・Aaron Bowman. 2005. オオクチバス急増にともなう魚類群集の変化が水鳥群集に与える影響. Strix 23: 39-50.

坪島遊. 1994. コサギ *Egretta garzetta* によるくちばしを疑似餌とした採食行動. Strix 13: 221-223.

内田博. 2007. 埼玉県でのコサギの越冬個体の減少要因を探る. 日本鳥学会2007年度大会講演要旨集 pp.130.

山田清. 1994. 餌および採食環境に応じたコサギ (*Egretta garzetta*) の採食行動と採食なわばり. 日鳥学誌 42: 61-75.

執筆者

平野 敏明 バードリサーチ研究員



学生時代から川で鳥を調査することが多く、当時はコサギのいる風景は当たり前だった。そのコサギが川から姿を消したことに愕然とするとともに、あまりにも普通に見られたことで個体数をきちんと記録してこなかったことに、今後悔している。